

# 暮らしに基づいた地域の特徴を捉える 資料としての写真の活用可能性

尾野 薫<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 博士(工) 徳島大学大学院理工学研究部 (〒770-8055 徳島県徳島市南常三島町2-1,  
E-mail:kaoru\_o@ce.tokushima-u.ac.jp)

本研究では、徳島県佐那河内村を対象地として、個人所有の写真と集落単位での写真について、それぞれ写真の特徴を明らかにし、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての活用可能性について検討した。その結果、個人所有の写真と集落単位の写真それぞれの活用可能性について考察し、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性について検討した。その結果、個人所有の写真は自宅や小学校といった特定のスポットに対する資料としての活用が、集落単位の写真は人の意識や繋がりを読み取る資料としての活用が向いている可能性を示唆するとともに、写真同士の組み合わせや語りを付加させることで、空間的・時間的な繋がりをもち資料として活用することが可能になると考える。

**キーワード:**活用可能性, 写真, 集会所, 集落単位, 地域の特徴

## 1. 序論

### (1) 背景・目的

近年、写真をアーカイブとして保存・公開し、まちづくりや観光等に活用する取り組みが行われている。例えば、徳島市立図書館では、『とくしまデジタルアーカイブプロジェクト 徳島市の昔の写真』([https://www.city.tokushima.tokushima.jp/toshokan/riyou\\_annai/top/electronic/picture/index.html](https://www.city.tokushima.tokushima.jp/toshokan/riyou_annai/top/electronic/picture/index.html))として市民から1990年以前に撮影された徳島市内及び市内各地域の街並みや風景・建物などの写真をデジタル化し、写真の二次利用まで条件付きで認めている。また、『敦賀港レトロ浪漫AR』(<http://www.tsuruga-ar.jp/>)のように、現実空間と古地図や古写真を比較しながら楽しむアプリの開発・実用化も進んでおり、まちづくりや観光における古写真の活用は今後更に発展していくことが考えられる。しかし、こうした写真は街並みや風景・建物などのように、すぐに思い浮かぶ代表的な地域固有の景観構成要素や特性が選定されやすいと考えられる。

一方で、住民の暮らしの記録として残された写真は住民の日常生活の中で撮影されており、所有者やその親族のみで共有するものとなっている。これらの写真は、必ずしもすぐに思い浮かぶ代表的な地域固有の景観構成要素や特性が撮影されている場合もあるが、多くは住民の暮らしに関連する空間や出来事によって撮影されていると考えることができる。しかし、地域の暮らしを記録した資料としての価値基準では

なく、保存状態や写真の内容等による判断で処分されているのが現状である。また、暮らしに基づいたまちづくりや地域計画に対する関心が高まりつつある中で、住民の暮らしの記録として残された写真は暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての活用可能性は高いと考えられるが、その可能性について言及した研究はあまりない。

よって、本研究では、住民の記録として残された写真を対象として、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての活用可能性について検討する。

### (2) 既往研究整理による研究の位置づけ

写真を用いた研究には、現況の地域特性把握、写真による地域の変遷・形成過程の分析、写真の活用法、などがある。

現況の地域特性把握では、住民や観光客に「集落内で印象的だと思う風景<sup>1)</sup>」「好ましい景観」「好ましくない景観<sup>2)</sup>」等のテーマに沿って撮影してもらった写真から、現況の地域特性や被験者の選好特性について分析している。写真による地域の変遷・形成過程の分析では、航空写真<sup>3)</sup>や古写真<sup>4)</sup>を分析対象とし、写真の構成要素とその変化から空間的変遷を明らかにしている。これらの研究では、地図資料等が現存しない戦前開拓村や被災地に対し、古写真や航空写真が資料として有効であると示している。また、写真の活用法に関する研究では、古写真が住民の回想を引き出すためのきっかけとして有効であること、回想には自分の体験を話す「回想語り」と

「知識語り」があることなどが明らかにされている<sup>9)</sup>。

本研究は、住民の記録として残された写真を対象として、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての活用可能性について検討することを目的とする。よって、古写真や航空写真が資料として有効である点、住民の回想を引き出すためのきっかけとして有効である点から、写真による地域の変遷・形成過程の分析や写真の活用法に関する研究に類するものであると位置づける。

住民の暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料には、自叙伝や市町村史などがあり、写真も当時の様子を伝える資料活用される。しかし、1章(1)で述べたように、こうした写真は街並みや風景・建物など、すぐに思い浮かぶ代表的な地域固有の景観構成要素や特性が選定されやすい。本研究では、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性を検討するため、住民が個人で所有している写真を分析対象とする点に新規性があると考えられる。

### (3)対象地の選定

本研究では、徳島県佐那河内村を対象地に選定した。徳島県佐那河内村は、1945年には最大5,683人が暮らした徳島県唯一の村である。交通網の発達や高度経済成長による都市への人口移動等により、現在では2,488人(2016年3月末時点)まで人口は減少している。この人口減少を受け、佐那河内村は2015年に『移住・交流推進アクションプラン』を策定した。

(<http://www.vill.sanagochi.lg.jp/docs/2015061600029/>) これは、将来、集落を維持するために、農村風景と暮らしの維持・保全を前提とした計画的施設整備と移住者獲得のための施策を展開するものである。また、移住者は佐那河内村内に残る地縁組織や人と自然との繋がりを理解し、住民は移住者が入ってきやすいような居住環境の整備や支援体制を整える必要があることを示し、そのプロセスについても明記されている。こうした取り組みの中で、

これから住民として暮らしていく移住者に向けた資料として写真を活用することが検討されている。これは、本研究の目指す住民の暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用と合致する。よって、本研究では佐那河内村を対象地に選定した。

## 2. 個人所有の写真の特徴

### (1) 写真の収集

佐那河内村の住民に対し「佐那河内村内で撮影した写真」を収集したいと告知した結果、3軒から写真をお借りすることができた。各住民の写真枚数を表-1に、写真の例を図-1に示す。B氏・C氏は大正～昭和時代にかけての写真だが、具体的な年代や日時は不明だった。

### (2)各分類における写真の特徴

お借りした写真について、撮影されている内容により分類した(表-1)。本節では、各分類における写真の特徴を明らかにするとともに、住民の暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性について検討する

#### a) 人物写真

人物写真は全部で76枚あった。内容は様々であるが、子供や女性、家族が多く写っていた。服装は和装や洋装などがあり、大正～昭和初期にかけて洋装が普及していく様子を見ることができる。また、C氏は「当時、上海土産の洋服が珍しく、着せてもらって記念撮影をした」と証言しており、洋装を記念として撮影していたことがわかる。こうした写真は、自宅と考えられる家屋周辺や学校で多く撮影されていた。以上より、人物写真は家族や子供の成長の記録として身近な場所で撮影されており、所有者自宅周辺の変化や形成過程を分析することが可能な資料であると考えられることができる。

表-1 個人所有の写真枚数と分類

	枚数	人物写真	出来事	生業	風景	その他
A氏	50		31	15	5	
B氏	81	75	4		2	
C氏	12	1	9	1		1
計	143	76	44	16	7	1
内容	子供 家族	祭 起工式 青年団 敬老会 卒業式	晩茶づくり 田植え	庭 夕日 集落	談笑	
場所	自宅周辺 学校	学校 神社 集会所	自宅 田	自宅	苺ハウス	



図-1 個人所有の写真(例)

## b) 出来事に関連する写真

出来事に関連する写真は全部で44枚あった。内容は祭や起工式・完成記念・卒業式といったイベントや、青年団・敬老会といった集まりの2パターンがみられた。撮影場所は神社・学校・集会所など集合した場での撮影や、イベントが開かれた場であった。このうち、2004年に着工した新府能トンネル起工式に関する写真は、近年集合写真ではなく式典の様子が撮影されていた。こうした写真は、物珍しさやイベントの記録として撮影されたと考えることができる。以上より、出来事に関連する写真は、日常の中の定期的なイベントか、非日常的なイベントが発生した場合に、その場で撮影されており、物珍しさや記録としての意味が強いと考えることができる。そのため、暮らしに基づいた地域特性を読み取ることは難しいが、他の住民に小学校や集会所といった日常的に利用する場所がどのように使われていたか、あるいは既往研究のように空間的変遷を理解するための資料としての活用可能性は十分にあると考えることができる。

## c) 生業に関連する写真

生業に関連する写真は15枚あり、内容は晩茶づくりの工程が15枚、田植えの様子が1枚であった。晩茶は、那賀町や上勝町で現在でも作られている。佐那河内村でも、かつては各家庭で自家用として晩茶づくりをしていたが、現在はあまり見られなくなっている。これより、技術の継承も行われていない可能性もあるため、晩茶づくりが暮らしの一部であったことや、その工程を伝えるための資料として活用することが可能である。しかし、生業に関連する写真は撮影されにくいため、暮らしの一部として今後記録を残す必要性があるとも考えることもできる。

## d) 風景に関連する写真

風景に関連する写真は7枚で、庭の写真が4枚、集落の写真が2枚、夕日が1枚であった。この中でも集落の写真は、現在の風景との比較が可能であり、所有者の自宅とその周辺として撮影されていた(図-2)。この集落の写



図-2 所有者の自宅とその周辺

真は、既往研究と同様に集落の空間的変遷を理解するための資料として活用可能である。

## (3) 個人所有の写真の特徴と活用可能性

前節より、個人所有の写真には、撮影された内容に偏りがあることがわかる。しかし、いずれの内容においても、住民の暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性があることが明らかになった。このうち、人物写真や生業に関連する写真は暮らしに基づいた地域の特徴を読み取る資料として、出来事や風景に関連する写真は地域の空間的変遷を読み取る資料として活用できる可能性があると考えられる。しかし、いずれの場合においても、写真の撮影場所や撮影時期、内容については不明確であることが多い。よって、その写真に対する語りを付加することで、資料としての活用可能性が広がると考える。

本章で収集した写真以外に、D氏から集会所に置いている写真を提供していただいた。よって、次章では集会所に置かれている写真について調査・整理することで、写真の活用可能性について考察する。

## 3. 各常会に関連する写真による各地区の特徴

佐那河内村には地縁組織のひとつである常会という自治会が47存在しており、各常会に集会所が設けられている。この集会所を拠点として各常会が活動を行っており、移住者への支援体制や関係づくりも常会の場で行われている。集会所は複数集落で使用している場合もあり、集落単位の意識だけではなく、集落同士の関係についても分析することが可能である。また、佐那河内小学校として統合される前、佐那河内村には小学校が3校あり、現在でも各小学校区で地区を区別する場合がある。

本章では、暮らしの一部である常会と地区着目し、集会所に置かれている写真を調査・分類し、各常会・各地区の暮らしに基づいた地域の特徴を探ることで、写真の活用可能性について考察する。

### (1) 写真の収集

47常会に対し、集会所は28箇所設置されている。今回は、27箇所の集会所において、置かれている写真の枚数と内容を調査・分類した。なお、47常会のうち、2つの常会については、集会所の確認がとれなかったため、再調査を行う必要がある。集会所と各常会を、図-3に示す。

また、秋城集会所を除く全ての集会所に『村の写真集 伝えたい村の話<sup>9)</sup>』に掲載されている各常会の集合写真(図-4)が置かれていた。『村の写真集 伝えたい村の

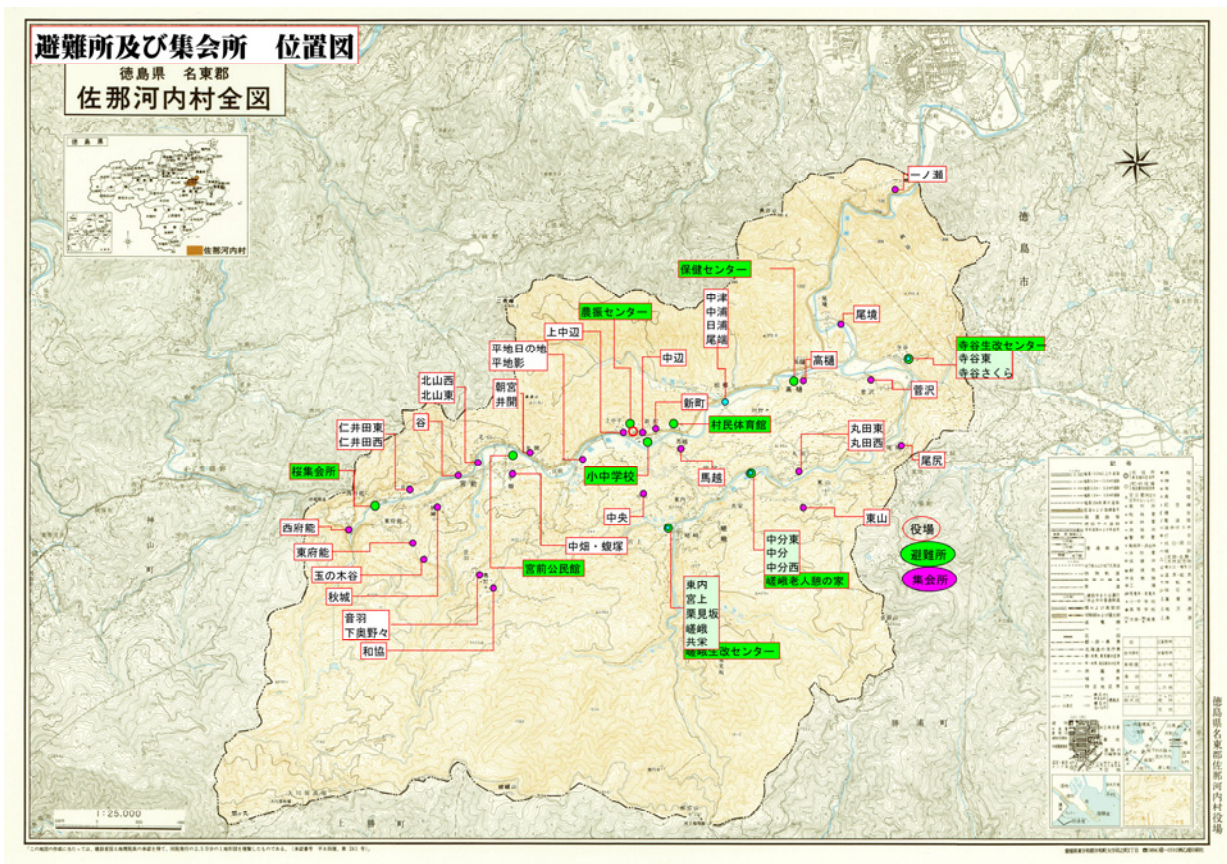


図-3 佐那河内村における避難所及び集会所位置図 (佐那河内村役場 提供)

話』は、佐那河内村出身のカメラマン荒井賢治氏によって撮影された写真集(図-5)で、佐那河内村の姿をそのまま残し、後の世代に伝えるために企画され、写真集は全戸に配布されている。よって、本章では、集会所内に置かれている写真に加え、『村の写真集 伝えたい村の話』内の各常会のページに掲載されている写真も併せて分析した。調査・分類結果を表-2に示す。

## (2) 写真集における各常会の写真の特徴

写真集に掲載された写真は、写真家によって選定された各常会の集落内で撮影されている。26箇所の集会所に置かれていた写真集の集合写真と、写真集に掲載されている各常会の写真について、集合写真の撮影場所、掲載された写真の分類を行った。結果は表-2に併せて示す。

表-2より、集合写真の撮影場所には、大きく分けて集落を背景とする場合、神社や集会所のように人が集まりやすくランドマークとしての機能を有する場合、潜水橋や石積みのように佐那河内村でも独自の要素を有する場合の3つがあることがわかった。いずれの場合においても、家や神社、山、田畑、橋、川など写真に写る要素は、各集落の構成要素として捉えることが可能である。また、それぞれの場合に対し、視点・視点場・視対象・対象場のいずれを重視して地域の特徴を表現しようとしている



図-4 各常会別の集合写真(例)



図-5 『村の写真集 伝えたい村の話』



のかについて分析することで、写真による地域の特徴の把握パターンを明らかにすることも可能である。しかし、その構成要素や把握パターンと住民の暮らしとの関係については、集落全体の構成要素と各集落の主な生業、農作物等の情報と併せて分析する必要がある。

また、各常会のページに掲載されている写真は、各常会の集落の特徴を表す写真である。そのため、俯瞰写真やアイレベルでの集落写真が多く、撮影場所の把握までは至っていない。しかし、撮影場所を把握することができれば、定点観測による地域の空間的変遷の理解へと繋がり、集落全体の構成要素と暮らしの関係と併せて分析することで、暮らしの変化が空間に与える影響について分析することにも繋がると考えられる。

以上より、写真集に掲載された各常会の写真は、単体では暮らしに基づいた地域の特徴を明らかにすることはできないが、写真集をきっかけとして、地域の特徴の把握パターンや、集落全体の構成要素と各集落の主な生業、農作物等の情報といった他の視点、定点観測による空間的変遷などを組み合わせることで明らかにすることは可能であると考えられる。

### (3) 各集会所の写真からわかる各地区の特徴

表-2より、集会所に置かれている写真を、集合写真、祭における集合写真、旅行、祭事、完成記念、航空写真、その他に分類した。このうち、集合写真は秋城集会所を除く全ての集会所で確認されたが、これは『村の写真集 伝えたい村の話』の集合写真も含めた枚数である。写真集の集合写真以外の写真を置いている集会所は20箇所、その枚数にはばらつきがあった。集合写真は老人会やスポーツ大会等において撮影されており、スポーツ大会に関する情報として、写真以外にも賞状が各集会所ごとに飾られている場合が多かった。

集会所によっては、他の集会所と同じ写真を置いている場合もみられた。府能生活改善センターと東府能集会所では、同じ集合写真が複数枚確認された。このことから、西府能常会と東府能常会と一緒に活動する機会が多

く、常会を超えた交流があると考えられる。また、和協集会所と奥野々集会所と中畠蝮塚集会所では、イベント参加時の獅子舞の集合写真が確認された。その中でも中畠蝮塚集会所には獅子舞の写真が多数確認されており、獅子の道具や太鼓も確認された。このことから、集落人口が減り、若者が減少する中で、伝統芸能として獅子舞を保存・継承するために、中畠蝮塚集会所を拠点として他集落と協力していると考えられる。一方で、写真が確認されなかった秋城集会所では、何らかの活動を行う場合は仁井田東・仁井田西常会等の常会と一緒に活動しているため、写真は全て仁井田集会所等に集約されていることが、住民の証言から明らかになった。以上より、宮前地区では日頃から他の常会と一緒に活動する機会が多く、地区内に複数常会ごとのまとまりがあることがわかった。

嵯峨地区は集会所が4箇所と少なく、複数常会による集会所の共有が多く行われている地区である。このうち3箇所について調査を行ったが、他地区と比較して写真の枚数は少なく、祭りや祭礼に関する写真はなかったが、嵯峨生活改善センターが立地している嵯峨天一神社の社内に祭に関する写真が収蔵されていた。嵯峨地区には嵯峨名中という神社の氏子による地縁組織活動がさかんに行われていることから、嵯峨地区は嵯峨名中による活動によって嵯峨天一神社を核とした地区内での結びつきが強いと考えられる。また、嵯峨生活改善センターにはスポーツ大会等の写真や賞状も確認されており、中には嵯峨地区としての賞状もあった。このことから、嵯峨地区は、常会や集会所単位ではなく、地区としてひとつのまとまりを強く意識している地区であると考えられる。

高樋地区は、他の地区と比較して、写真の数が少なく、複数の常会で集会所を共有している箇所も少なかった。写真が多かった寺谷・新町・中辺・馬越集会所においてのみ祭や祭礼に関する写真が確認できたが、寺谷生活改善センターでは祭の様子を、新町・中辺・馬越集会所では各常会で撮影した祭の集合写真が置かれていた。また、旅行の集合写真は新町・中辺集会所でのみ確認された。

表-3 各集会所の写真からわかる各地区の特徴

地区	神社	集合写真撮影場所	集会所写真の傾向	集落の特徴
高樋	大宮八幡神社	橋(川) 集落	写真は少ない 大宮八幡神社付近では祭の写真が増加	個別活動 身近な神社に対する意識
宮前	朝宮神社	神社	祭を中心とした写真の増加	複数常会との連携した活動
		棚田		和協・奥野々・中畠蝮塚 獅子舞による集落間の連携意識
		畑		仁井田・北山・谷・秋城 身近な神社に対する意識
		縁側(家)		老人会等は一緒に活動(拠点はさくら集会所)
		西府能・東府能	老人会等は一緒に活動	
		玉の木	2軒のみで活動	
嵯峨	嵯峨天一神社	集会所 神社 畑	嵯峨地区としての写真が嵯峨神社に集約	嵯峨地区としてのまとまり意識 嵯峨天一神社を核とした嵯峨名中による活動

よって、高樋地区では、各常会が個別で活動しており、常会や集会所同士の連携や繋がりについては、集会所の写真からは確認できなかった。

以上より、集会所の写真や賞状から、各常会と各地区の特徴を明らかにした。その結果、集会所の写真や賞状からは、他の常会や集会所との連携を明らかにすることができ、連携するきっかけには暮らしの中の活動と名中といった地縁組織があると考えられる。しかし、これは集会所間の比較を行うことで明らかになった特徴であり、集会所単体では各常会の特徴を明らかにすることは難しい。このことから、各集会所の写真から地域の特徴を理解するためには、集会所間での比較や写真集のような他の写真や資料と組み合わせることが必要だと考えられる。

#### (4) 各常会に関連する写真による各地区の特徴

3章(2)(3)より、写真集と集会所の写真からわかる各地区の特徴を表-3に示す。各地区における暮らしの中での活動について、集落単位での意識や繋がりを写真から読み取ることができ、写真は資料としての活用可能性を有していると考えられる。しかし、ひとつの集会所や常会から分析することは難しく、複数の資料や視点との組み合わせが重要になると考える。

#### 4. 暮らしに基づいた地域の特徴を捉える 資料としての写真の活用可能性

2章では、個人所有の写真に対し、住民の暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性があることを明らかにした。また、3章では、各常会に関する写真集と集会所の写真について、資料としての活用可能性を有しているものの、ひとつの集会所や常会から分析することは難しく、複数の資料や視点との組み合わせが重要になると述べた。本章では、以上の結果を踏まえて、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性について検討する。

個人所有の写真では、人物写真や生業に関連する写真は暮らしに基づいた地域の特徴を読み取る資料として、出来事や風景に関連する写真は地域の空間的変遷を読み取る資料として活用できる可能性がある。2章で述べた。これに対し、常会や集会所という集落単位の写真は、各地区における暮らしの中での活動について、集落単位での意識や繋がりを写真から読み取ることができる。そのため、個人所有の写真は自宅や小学校といった特定のスポットに対する資料としての活用が、集落単位の写真は人の意識や繋がりを読み取る資料としての活用が向いていると考えられる。

一方で、個人所有の写真は撮影場所や撮影時期、内容が不明確であることが多く、その写真に対する語りを付加する必要があると考える。例えば「これは〇〇さんのおじいさんで、その隣は△△さんのところ」や、「これは今のこの場所ができるだいぶ前の写真」のように、語りが付加されることで資料としての活用可能性が広がると考えることができる。更に、写真のように集会所に置かれている祭の記念写真に加え、個人所有の写真を併せて保管・提示することで、祭や地域内での活動の履歴を示す資料とすることもできる。以上より、個人所有の写真においても、集落単位の写真においても、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料として活用するにあたり、写真同士の組み合わせや語りを付加させることで、空間的・時間的な繋がりをもつ資料として活用することが可能になると考える。

#### 5. まとめ

##### (1) 結論

以下に、本論で得られた結論を示す。

- a) 個人所有の写真の特徴を明らかにするとともに、住民の暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性があることを明らかにした。このうち、人物写真や生業に関連する写真は暮らしに基づいた地域の特徴を読み取る資料として、出来事や風景に関連する写真は地域の空間的変遷を読み取る資料として活用できる可能性を示した。
- b) 各常会や集会所という集落単位の写真に対し、各地区における暮らしの中での活動について、集落単位での意識や繋がりを読み取る資料としての活用可能性を示すことができた。しかし、ひとつの集会所や常会から分析することは難しく、複数の資料や視点との組み合わせが重要になることを明らかにした。
- c) 個人所有の写真と集落単位の写真それぞれの活用可能性について考察し、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての写真の活用可能性について検討した。その結果、個人所有の写真は自宅や小学校といった特定のスポットに対する資料としての活用が、集落単位の写真は人の意識や繋がりを読み取る資料としての活用が向いている可能性を示唆した。また、個人所有の写真においても、集落単位の写真においても、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料として活用するにあたり、写真同士の組み合わせや語りを付加させることで、空間的・時間的な繋がりをもつ資料として活用することが可能になると考える。

## (2) 今後の展望と課題

本研究は、住民の記録として残された写真を対象として、暮らしに基づいた地域の特徴を捉える資料としての活用可能性について検討した。今回は3軒の個人所有の写真での検討となっている。よって、今後は個人所有の写真の軒数を増やすとともに、個人所有の写真を集積させ、集落単位での地域特性について分析していく必要がある。また、写真同士の組み合わせや語りの付加により、空間的・時間的な繋がりをもつ資料としての活用を検討することも、写真を移住者に対する地域の理解を促す資料として活用していくためには重要になると考える。

**謝辞：**本研究の資料調査において、佐那河内市役所の安富圭司氏、西川高士氏には多大なご協力を頂いた。また、佐那河内村民の方々には、貴重な写真を多数提供していただいた。厚く謝意を表す。

## 参考文献

- 1) 大石洋之, 村川三郎, 西名大作: 被験者の撮影写真における選好景観特性の分析, 日本建築学会環境系論文集, No. 611, pp. 75-82, 2007
- 2) 大石洋之, 村川三郎, 西名大作: 被験者の撮影写真における選好景観特性の分析, 日本建築学会環境系論文集, No. 611, pp. 75-82, 2007
- 3) 杉安和也, 村尾修, 川崎拓郎, 韓海燕, シャー エムディオエズ: 航空写真を用いた東日本大震災被災地における住宅変遷の評価, 日本地震工学会論文集, No. 12(6), pp. 120-132, 2012
- 4) 山崎義人: 古写真を通じた戦前からの開拓村の形成過程の解読方法 -兵庫県三田市下相野平野集落を事例として-, 日本建築学会計画系論文集, No. 76(664), pp. 1137-1144, 2011
- 5) 古賀紀江, 横山ゆりか: 場所の写真に対する自立高齢者の語りについての研究 知識語り・回想語りと居住地域の環境, MERA Journal=人間・環境学会誌, No. 10(1), pp. 31-40, 2007
- 6) 佐那河内村総務企画課 編: 村の写真集 伝えたい村の話, 佐那河内村役場, 2012